

## 社会的孤立の実態と防止策

愛知東邦大学 経営学部 1年 今瀬政司ゼミナール

青木 花凜

### 要旨

本研究では、先行研究で重要視されてきた社会的孤立の問題に対する効果的な解決方を明らかにすることを目的に、社会的孤独対策先進国といわれるイギリスで行われている取り組みと国内で行われている取り組みを調査・分析した。その結果、孤立者が誰かから気かけられていると感じられる環境作りが大切だということが明らかになった。これを基に、筆者は社会的孤立者への支援策としてマッチングアプリの開発と、世代間交流の機会づくりを提案した。この2つの支援策を実施すれば、孤立者と人との繋がりを無理なく、継続的に広げていくことができるのではないかと考える。

**Keyword** : 社会的孤立、世代間交流、居場所づくり

### I.研究の概要

#### I-1.研究目的

2019年発表の国土交通省の死因別統計データによると、2003年時点では1,441人だった65歳以上の高齢者の孤独死数は、2018年には3,867人となり、15年間におよそ2.68倍に増加した。内閣府は、孤独死の他にも社会的孤立がひきこもりや高齢者による犯罪、自殺者の増加などといった様々な社会問題の要因の一つになっていると指摘している。「現代の社会問題として、真正面から向き合うことが必要である」という考えのもと、2021年2月に孤独・孤立問題に取り組む閣僚級ポストが設置(2021,内閣官房孤独孤立対策室)された。

本研究の目的は、社会的孤立と社会的孤立がもたらす様々な社会問題を解決するため、先行研究において重要視されてきた「社会的孤立」の問題に対する効果的な解決方策(空閑,2008, p 15)を明らかにすることである。

なお、「社会的孤立」の定義は様々だが、本研究では、内閣府の高齢社会白書に倣い「家族や地域社会との交流が、客観的にみて著しく乏しい状態」という意味で使用する。(2010,内閣府)

#### I-2.研究内容

初めに、先行研究で「自ら望んで孤立している人に対しても社会的に介入する必要があるのか」(2008,後藤,p15)と指摘されていたように、そもそも本当に社会的孤立は問題なのかをそれがもたらす影響をもとに考えていく。また、社会的孤立の状況に陥る人の特徴や背景、現在の日本で行われている支援活動例と他国で行われている支援活動例を分析・

調査し、現在の日本で行われている支援活動に足りないものは何なのか検討していく。

### I-3.研究方法

本レポートでは内閣府の『平成 22 年版高齢社会白書』やみずほリサーチ&テクノロジーの「社会的孤立の実態・要因等に関する調査分析等研究事業報告書」などの先行研究をもとにして、社会的孤立の状況に陥る要因や、現在行われている支援活動を分析し、解決方策を考えていく。

## II.研究結果

### II-1.社会的孤立がもたらす影響

社会的孤立は本当に問題なのか。社会的孤立がもたらす影響について調べてみると、『平成 22 年版高齢社会白書』において、いきがい意識調査の結果から、「困ったときに頼れる人」がいない人のうち、過半数となる 55.4%の人が「生きがいを感じていない」と回答（2010,内閣府,p.57）していることが記されている。また、孤立者は非孤立者に比べて、経済的困窮に陥る人の比率が高いことや、抑うつ傾向が強いこと、生活満足度が低い人や健康状態がよくない人の比率が高いことも明らかとなっている。さらに、犯罪者においては、初犯者に比べ、前科・前歴や受刑歴などがある人ほど、単身者が占める割合が高く、親族や親族以外の人との接触機会が少ない。つまり、犯罪を繰り返す高齢者に孤立の傾向が認められることが指摘されている。（2018,齋藤,p30-44）

### II-2.社会的孤立に陥る要因

社会的孤立に陥る要因として考えられるものとして、近所づきあいの希薄化がある。内閣府によれば、1998 年時点では 64.4%だった近所の人と親しく付き合っている人の割合は、2014 年には 31.9%となり、26 年の間に半分以下に減っている。また、核家族化や未婚者の増加による単身世帯が増えていることも要因となっている。（2014,内閣府,p25）

### II-3.社会的孤立を防ぐ取り組み例

2018 年 1 月当時のイギリスの首相は、「孤独は現代の公衆衛生上、最も大きな課題の一つ」として、孤独担当大臣を世界で初めて設けた（2021・多賀）。そのような社会的孤独対策先進国といえるイギリスで、社会的孤立を解決するために行われている取り組みを取り上げる。ここでは、高齢者向け慈善団体「エイジ・ユークエイ」による「ビ・フレンディングサービス」とイギリス最大手のコーヒーチェーン「コスタ・コーヒー」の「おしゃべりテーブル」の例を見ていく。

ビ・フレンディングサービスとは、ボランティアが地区の高齢者に週に一回、電話をかけるサービスだ。エイジ・ユークエイでは、高齢者とボランティアの興味や関心を前もって聞き取り、両者をマッチングするため、高齢者にとっては、毎週決まった人から電話がかかって

くることになり、生活に張りができる、つまり生きがいにつながるようだ(2021,多賀)。おしゃべりテーブルとは、店内の一つのテーブルを知らない人同士が囲む専用と決めて、そこでは誰もが自由におしゃべりができるというシステムだ。当初は全国25店でスタートしたが、反応が良いとして全国300店にまで広がった(2021,多賀)。

一方、日本では、孤立した人の居場所づくりとして、どのような取り組みが行われているのか調べた結果、社会的孤立者に声掛けを行い、「孤独にならないよう行事等の参加を促す」(2021,大阪府社会福祉協議会)取り組み例が多くみられることが分かった。この取り組みは、一部の人には効果があり、問題の一部は解決されてきている。

### III.分析結果

研究結果から、社会的孤立はすべての世代において、経済面や身体の健康、心の健康に悪影響を及ぼすことが明らかとなった。そうしたことから、社会的孤立は解決すべき問題だといえるだろう。

そこで、社会的孤立を解決するには、どうすればよいのだろうか。上記で挙げたイギリスの取り組み例から、孤立した人が必要とされていると感じる環境作りや居場所作りが重要だといえ、次のように考察を行った。

### IV.考察

研究結果でも述べたように、孤立した人の居場所をつくるために、日本では、社会的孤立者に声掛けを行い、「孤独にならないよう行事等の参加を促す」(2021,大阪府社会福祉協議会)支援例が多くみられる。たしかに、地域行事に参加するようになれば孤立は解消されやすくなるだろう。しかし、孤立者の中には自ら声を上げられない者も多く、既に出来上がった地域組織に突然参加するのは容易ではないと思われる。そこで筆者は、自ら声をあげられない社会的孤立者に対しても寄り添えるような解決方法を考えた。

孤立者の立場に立って考えてみると、地域行事に1人で参加するのではなく、同じような立場に立つ人と、2人3人と複数人で参加するほうが、心理的ハードルは下がるのではないだろうか。このことから、まず同じように社会的に孤立している者同士で仲を深める必要性があると考えた。そこで、仲を深めるためには何が必要なのかを調査したところ、「類似性の法則」を見つけた。

類似性の法則とは、自分と共通点のある人に親近感を抱くというもので、例えば、「出身地」が同じだとか「出身校」が同じだとか、あるいは「自宅の最寄り駅」が同じだとか。初対面の人でも、何か共通の事柄を見つけると一気に心理的な距離が縮まる場合があるというものだ。(2022,かんでんCSフォーラム)お互いが社会的孤立に陥っている状況だということは、たいへん大きな共通点となり、類似性の法則が作用するのではないかと推察される。

## V.提案・展望

### V-1.マッチングアプリを活用した支援策

筆者は、社会的孤立の解決方策として、内閣官房孤独・孤立対策担当室主導で、類似性の法則を活用した社会的孤立者のためのマッチングアプリを開発することを提案したい。詳細に述べるなら、孤立者によって入力された位置情報や今の悩み、好きなものなどの様々な情報を活用し、類似性の法則が強く作用する共通点が多い人を見つけ、通話やチャットができるマッチングアプリだ。このアプリを用いて、自治体と連携し、親しくなった孤立者同士が実際に会うことができる行事などを定期的に企画し、数回に1回、その行事に一般の地域住民らも招く。そうすることにより、孤立者と人との繋がりを無理なく、継続的に広げていくことができるのではないかと考える。そのためには、社会的孤立に該当する人々に、チラシを送ることや、孤独・孤立対策室のYouTubeアカウントで広告を配信し、このアプリを社会的孤立者に普及させる必要がある。

### V-2.高齢の社会的孤立者への支援策

次に、マッチングアプリを活用した支援からもれる人々、すなわちスマートフォンを所持していないあるいは使いこなせない高齢の社会的孤立者に対する効果的な解決方策を考えていく。そのために、高齢者がどのような活動に参加したいのか調べてみると、「趣味のサークル・団体」(2017,内閣府)に参加したいと考えていること、「約6割が若者との交流に参加したいと考えている」(2017,内閣府)ことがわかった。筆者は、この約6割が若者との交流、つまり「世代間交流」に意欲的だという事実に着目し、子どもとの交流が高齢者にどのような影響を与えるのか調べた。すると、子供との交流により、高齢者に地域共生意識や、楽しさ、生き生きとした気持ちが生まれたこと、参加者にとって特別な居場所となったことがわかった(2019,角・木下・福永)。そこから、世代間交流には、高齢者だけではなく子供側にも高齢者の今までの人生経験から知識や教養を教わることができるというメリットがあり、先行研究で指摘されていた「『助ける側』『助けられる側』という関係の固定化を防ぎ、孤独・孤立したときに互いに助けを求めやすい社会」(2022,岡本)の実現が期待できるのではないかと考える。

こうしたことから、筆者は、高齢者の社会的孤立の解決方策として、高齢者と子供の世代間交流の機会を増やすことを提案したい。具体的には、高齢者と学童クラブに通う児童に対して、事前に許可とアンケートを取り、両者をマッチングさせ、定期的に高齢者宅に児童が教職員と訪問するという取り組みだ。この取り組みは、研究結果で取り上げた「エイジ・ユークエイ」による「ビ・フレンジングサービス」から着想を得た。この取り組みを行えば、「孤独・孤立したときに互いに助けを求めやすい社会」(2022,岡本)の実現のみならず、「ビ・フレンジングサービス」で得られた生きがいの向上効果も同様に得られるのではないかと考える。

### V-3.今後に向けて

今後も、人間付き合いの希薄化や未婚者、単身世帯の増加が進むと予想される我が国において、社会的孤立者はさらに増加する可能性が高い。社会的孤立者の増加は様々な悲劇を生む。社会的孤立者の「居場所」をつくれるかが、これからの日本社会の課題となるだろう。

## 引用・参考文献

内閣官房 孤独・孤立対策担当室 (2021)「あなたはひとりじゃない」<https://www.notalone-cas.go.jp/support/> (閲覧日 2022 年 11 月 7 日)

内閣府 (2010)「第 1 章 第 3 節 1 社会的孤立に陥りやすい高齢者の特徴」  
<https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2010/zenbun/html/s1-3-1.html>(閲覧日 2022 年 11 月 7 日)

後藤広史 (2008)「社会福祉課題としての『社会的孤立』」

内閣府 (2010)『平成 22 年版高齢社会白書』

斎藤雅茂(2018)『高齢者の社会的孤立と地域福祉』

内閣府 (2014)『平成 26 年版高齢社会白書』

内閣府 (2017)『平成 27 年版高齢社会白書』

みずほリサーチ&テクノロジーズ(2021)『社会的孤立の実態・要因等に関する調査分析等研究事業 報告書』

多賀 幹子 (2021)「イギリスの孤独対策に学ぶ」NHK 解説委員会  
<https://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/400/458360.html> (閲覧日 2022 年 10 月 31 日)

大阪府社会福祉協議会 (2021)「社会的に孤立している人々への支援にむけての取り組み」  
<https://www.osakafusyakyo.or.jp/minkyotebiki/pdf/014-4.pdf> (閲覧日 2022 年 11 月 7 日)

かんでん CS フォーラム (2022)「類似性の法則 | コールセンターの心理学」  
<https://www.kcsf.co.jp/contact/similarity.html> (閲覧日 2022 年 11 月 7 日)

岡本真希子 (2022)「高齢者の孤独・孤立対策にどう取り組むか」日本総研  
<https://www.jri.co.jp/page.jsp?id=102203> (閲覧日 2022 年 11 月 14 日)